

わが国における外科の夜明け

～その余話～

森岡 恭彦

わが国は古くから中国の医学、漢方を受け入れてきたが、漢方では外科には関心が薄く、限られた手術が行われていたにすぎなかった。16世紀半ばにはポルトガルの宣教師らが西洋医学をもたらした。江戸時代には幕府の鎖国政策によって長崎の出島にやって来るオランダの医師によって西洋の医学が伝えられた。当時の西洋医学では内科の治療はなお有力でなく、主に外科が注目され、オランダ流の医師、蘭方医は外科医と言えた。特に、長崎に在住した通詞（通訳）はオランダ医学に接する最前線にいて、オランダの医学を学んだ通詞たちは外科医として活躍し流派を立てた。その一人で榎林流の榎林鎮山は1706年にわが国最初の外科書である「紅夷外科宗伝」を著し、さらにこれを基に1735年に西玄哲は「金瘡跌撲療治之書」を、1769年には伊良子光頭は「外科訓蒙図彙」を著し、当時、多くの外科医に読まれた。榎林鎮山の書は16世紀のフランス、ルネッサンスの床屋外科医として有名なアンブロアズ・パレ（Paré A.）の書いた外科全書を基に、オランダのスクルテタス（Scultetus J.）の外科書などを参照して書かれたものである。内容は刺瘡・切瘡・銃瘡（金瘡）、骨折、脱臼などの処置や外用薬（塗り薬）についての記述が中心である。ともあれこのような外科書の内容はこれまでのわが国の医師には斬新なもので、パレの書はわが国の外科のルーツであるとも言えるわけで、われわれは1990年にはフランスでの「パレ没後400年祭」に呼応して、東京で記念会を開催し、また彼の生地のリヴァールに記念の燈籠を寄贈したりした¹⁾。

江戸時代中期以後、西洋書の翻訳が盛んになり、1774年には杉田玄白らが「解体新書」を発刊したことはよく知られているが、解剖学は外科医の基本となるもので、この書の発刊の意義は大

きい。さらに、1820年頃から、当時の本格的な外科書であるドイツの外科医のハイステル（Heister J.）の外科書（オランダ語訳）の翻訳書が大槻玄沢らによって発行された。これらの外科書は麻酔のない時代のものであるが、当時の日本の外科医はどの程度に理解しどのような手術を行っていたのかということになると当時では各流派で治療の方法は秘伝とされていたこともあって、その内容を知ることは容易ではない。

江戸時代になると戦争がなくなり、創傷と治療の重要性が減じ、18世紀後半に活躍し当時では最高の外科医とされた長崎の吉雄耕牛は頭部損傷の処置、兎唇・痔疾患・鎖肛・鎖陰の手術、体表の腫瘍（乳癌を除く）の摘除、腹部外傷（腸管縫合を含む）の治療、胸腔穿刺などを手掛けていたとされる²⁾。しかし、江戸時代後期の最大の外科医は自ら考案した麻沸散（通仙散）を使って全身麻酔下に多くの手術をした華岡青洲である。彼は19世紀初頭に活躍し、上述のような手術以外に乳癌、陰茎癌など数多くの手術をも行い、特に多数の乳癌の切除術を行ったことは特筆される。松木明知によると154人の手術患者の中、調査し得た33人の手術後の平均生存月数は52か月とされ、当時としては格別に良好な成績である。また青洲の弟子は1800人を超え、彼らの状況の多くが知られていないがその活躍の片りんが認められている。特に水戸藩の侍医になった本間玄調などは青洲の手術をさらに発展させている³⁾。しかし、この薬物による全身麻酔法も用法、調節が難しく、幕末になると西洋からガス麻酔が導入され廃れてしまう。

幕末には長崎に学んだ緒方洪庵は大阪に適塾を佐藤泰然は佐倉に順天堂を創り洋醫、蘭方医の養成に努めた。また長期にわたり滞在したシーボルト

トやボンベに学んだ外科医たちが幕末から明治維新に活躍し、彼らの経緯をたどると興味深い。

明治時代になると政府はドイツ医学の導入を決め、明治4年にはドイツ人の教師が東京大学に赴任し医学の教育にあたり、また主にドイツに留学し帰国した日本人の外科医たちにより外科が発展することになった。特にガス麻酔と消毒法が導入され開腹手術も行われるようになり、ドイツに学んだ東京大学教授の近藤次繁は1897年に胃癌に対する胃切除に成功している。

このように明治時代になってわが国は本格的にドイツ医学を導入したが、外科については江戸時

代後半には世界にひけ劣らないようなレベルにあったと言って過言ではなからう。

参考文献

- 1) アンブローズ・パレ没後400年記念会実行委員会 編著：日本近代外科の源流。メディカル・コア、1992年
- 2) 阿知波五郎：近代外科学の成立。日本医史学会、1967年
- 3) 呉秀三：華岡青洲先生及其の外科（復刻）。思文閣、1971年

（平成27年12月六史学会合同例会）

三重県の本草学者 丹波修治

河村 典久

丹波修治（にわしゅうじ）は、名は公憲、字は之翰で修治はその通称で、退翁、菅屋または清風と号した。文政11（1828）年6月15日に尾張国愛知郡前田一色（現在の名古屋市中川区下之一色）にて、木村和平の次男として生まれた。弘化3（1846）年、伊藤圭介の門下となり、本草学・蘭学を修めた。嘉永元（1848）年9月、伊勢国朝明郡大矢知村川北・丹波衛門（修平）の長女・つき子の婿養子となった。丹波家は代々地域医療の中心としてかかわってきたが、修治は医療よりも本草学者としての活動に重点を置いたようで、長男・玄一郎医師の早逝により、やむなく医師として医療にかかわった程度で、次女・徹子の婿養子・金永医師を得て、悠々自適の本草学者として本領を発揮することとなった。

丹波修治の業績としては、三重県における地方の本草研究者として活動し、明治5（1872）年 興国博覧会出品取調御用掛、明治9（1876）年の内国勸業博覧会の開催に当たり、三重県勸業課に出仕して県産物の調査を主管。明治14（1881）年、第2回勸業博覧会三重県物産取調嘱託となった。そして明治15（1882）年7月2日に、近隣の仲間

を集めて第1回交友社博物会を桑名浄土寺にて開催した^{1,2)}。博物会は年に2回の開催で、会員は当時としては珍しい鉱石や、植物、関連した資料などを多数陳列した。一方、師である伊藤圭介らが開催してきた尾張の博物会である『嘗百社』は、明治に入って圭介が東京に移りその活動を休止していたが、丹波修治は、明治22（1889）年3月20日、嘗百社を加え『北勢嘗百交友社』として統合し、同年8月1日に伊藤錦窠先生招聘博物談話会を開催して博物会を継承した。この博物会はその後明治35年11月9日の第31回まで続いた³⁾。そして、明治41（1908）年12月12日、81歳で病没した。丹波家の墓は朝明川近くの浄泉寺にあり、修治の戒名は『浄退院釋修知居士』とある。

丹波修治の輝かしい業績は、没3年後の明治44年に、朝明川堤防付近に記念碑として建立されており、その碑文には以下のような記載がある。なお、碑文の解説校閲は岩崎鐵志先生によるもので、句点を付した。

『丹波退翁碑』 丹波修治翁碑 錦雞間祇候貴族院議員從三位勲一等田中芳男篆額